【6】　小学部の児童にみられたからだづくりの成果

我々は、小学部の目指すからだ像「からだを動かすことを楽しむ子」に迫るべく研究実践を行ってきた。その一瞬一瞬は観えなくとも、長期的なビジョンで子どもたちを観た時に、この数年間の児童の成長発達を知ることができる。

この研究実践の真の評価は、本来１年単位でなされるべきものではなく、長い年月を経た後に行われるべきものであろう。このことを前提としながら、子どもたちの成長発達が観られた場面を取り上げ紹介していきたい。

からだを動かすことを楽しむというその表出の仕方は、発達段階、暦年齢、障害といった様々な要因が関与し、いろいろ異なるのが当然であろう。ここでは、児童の発達段階に着目し、感覚運動遊び段階の児童たち、みたて・つもり遊び段階の児童たち、仲間遊び段階の児童たち、そして精神発達的には仲間遊びの段階にあるが対人関係がもちにくい児童たちの４つのグループに分けて、彼らの成長発達が見られた場面を述べていきたい。

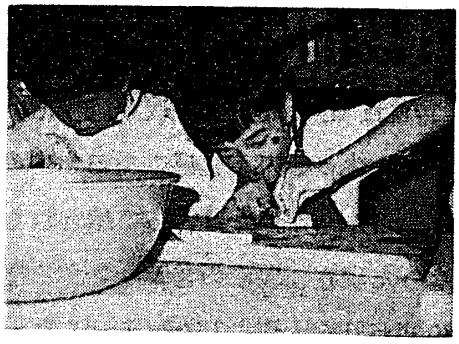
①感覚運動遊び段階の児童について

感覚運動遊び段階の児童に対しては、与えるべき題材・素材そのものが、より厳しく選定される必要がある。器用さを要求される活動よりは、粗大運動でできる活動の方が好ましい。また、単純な繰り返しによって、少しは見通しがもてるものが好ましいと考えられる。長期的なビジョンでの目標をもたせることはできないので、その時々にやる気をもたせていくことが必要となる。

ア．ぬりたくりを楽しむようになったＳ児

大きなダンボール箱を重ね、いろいろな模様をつけていくトーテンポール作りにおいて、Ｓ児はこれまでにない集中力を見せた。水のりの入ったバケツに思いきり手をつっこみ、手についたのりを箱にぬりたくった。手や腕のみならず、顔や足までのりだらけになりながら、これまで、落ち着いて学習に取り組めなかったＳ児が、熱中して取り組んだ１コマだった。

イ．野菜切りに集中して取り組むようになったＨ児

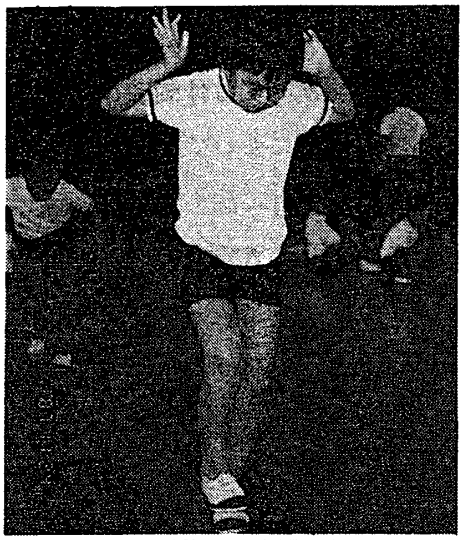


自閉的傾向をもつＨ児は、離脱行動が多く、集中して活動することのできにくい児童であったが、このカレーライスづくりでは先生が予め切りやすいようにスティック状にしておいたじゃがいも、にんじんをどんどん切っていくという積極的な態度が見られた。切れる感触を十分に楽しんで活動していたようだった。

②みたて・つもり遊び段階の児童について

みたて・つもり遊び段階に入れば、自己中心の世界ではあるが、象徴機能が芽生え、心の中にイマジネイションの世界がもてるようになる。その結果、少し嫌いな動きや活動でも、自分を何かにみた

てたり、なりきったりすることで、取り組むことができるようになる。この段階に入れば、本人の意志が強くみられるようになり、児童の心の世界が大きく広がる。



ア．ハットリくんになりきって生き生き活動したK児

この「忍者ハットリくん」は、忍者ハットリくんになりきってフープの中を片足で跳んだり、平均台を渡ったり、マットの上で前転したり、怪獣の絵の描いてあるボードにボールを投げつけたりするという一連の動きの連鎖からなる題材である。ふだん平均台渡りなど苦手なK児も、自分が大好きなこの忍者になりきった時には、ふだん見られない意欲と集中力を発揮し、平均台をほとんど自力で渡ることができた。

イ．力士になりきって土俵入りを楽しんだY児

すもうは、テレビで見てよく知っており、なじみのあるものである。その時、足をあげて、しこを踏んだり、塩をまいたりする対戦前の一連の動きは、子どもたちの興味をひくところである。Y児は、先生が塩にみたて、新聞紙を細かくちぎってまいたのを見て、一生懸命新聞紙をちぎりはじめた。そして自分が力士になったつもりで、塩をまくアクションを楽しんだ。

③仲間遊び段階の児童について

仲間遊びの段階に入ると、児童の遊びはさらに活発化、組織化してくる。友だちを意識し、競争したり、共同して物事に取り組むことができるようになる。やや自己中心性から脱却し、活動の内容についても、ルールのある組織された遊びやゲームに興味を示すようになる。

ア．競争意識をもって「しっぽとり」をしたR児

しっぽとりは、友だちの背中についているしっぽを目がけて走り、限られた時間の中で、できる限りたくさん取るゲームである。これまでの遊びでは、生き生きさがあまり見られなかったR児であるが、この遊びでは、M児、T児に対して競争意識をもち、楽しんで遠慮なく思い切った活動ぶりをみせた。あまり走れない児童のものではなく、先生やよく走る児童のものを取っているところに活動そのものを楽しんでいる様子がうかがえる。

イ．勝つという気持ちをもって「すもう」をしたM児

「すもう」は相手と直接触れあって、力を出し合い、勝ち負けを競い合う、まさにこの段階の児童にとっては、興味関心のある題材である。M児は何度もすもうがとりたくて、行司に呼びだされるのを今か今かとまっていた。自分の出番では、大きな児童を

相手に、勝とうとして思い切って向かっていった。日頃、ともすればエネルギーを持てあまし気味になるM児が生き生きした場面であった。

④精神発達的には仲間遊びの段階にあるが対人関係がもちにくい児童について

発達検査において、「発語」及び「対人関係」を除く、その他の事項について、ある段階まで達した自閉児がこれに該当する。見通しをもたせつつ、児童の好きな活動を通して、友だちと共同したり、競争したりする場面を段階的に作り、指導していくことが必要である。

ア．集団の中に入ってジェンカを踊ることができたF児

これまで、集団の中で活動することを嫌い、先生の目を盗んでは、離脱していたK児であるが、生活単元「運動会」の中の1つの題材であるジェンカでは、このようによい表情で踊っている姿が見られた。体を動かす楽しい活動が媒体であることも考えられるが、これまで集団参加する時間を少しずつ延ばし、負荷の与えかたをスモールステップで配慮してきた成果であると考えられる。

以上のように児童の発達段階に応じて、様々の「からだを動かすことを楽しむ子」という児童のからだ像をみることができた。

【7】　考察と今後の課題

本研究に取り組んで、本年で4年目、最終年次を迎えることとなった。1年次2年次は研究の骨子づくりをし、3年次から実践を充実させるべく「授業づくり」に取り組んできた。

からだづくりを目指した単元や題材の選定及び配列、年間指導計画の作成、そして個が生きる授業の工夫（同一教材・複数課題、複数教材・同一課題の検討）をし、より良き授業を指向して実践を積み重ねてきた。子どもたちから学ぶ姿勢を大切にしながら実践を続け、4年を経て、この研究実践の成果として次のような事項を挙げることができる。

1つは、具体的な動きのある活動（遊び活動）が媒体となる授業がなされ、子どもたちが、よりダイナミックな活動を進んで行うようになってきたことである。2つめは、小学部の実態にあったからだづくり、換言すればムーブメント教育を理論的背景とする感覚運動の発達を目指したからだづくりを行ったことにより、凹凸や歪みはあるものの児童の発達のスケールを大きく伸ばすことができたことである。さらに、3つめには、「なかよしタイム」での遊びの指導、また各教科・領域で遊び活動がふんだんに行われたことにより、からだを動かすことを楽しむ児童が増えてきたことを挙げることができる。このように一応の成果はあげられた。

しかし、残された課題もいくつかある。1つは、長期的な見通しのもとに着実に積み上げのできる指導計画の作成であり、2つめは、伸びてくる児童をどのような評価法で評価するかという問題である。さらに3つめは、発達のみならず障害に視点をあてたからだづくり養訓の充実を挙げることができる。

本研究で築きあげたものを小学部教育の糧としてさらに加えていくとともに、さらなる小学部教育の充実を目指して新しいテーマを模索していきたいと考える。